

株式会社木下築炉

自社のノウハウを糧に築炉の可能性を大分から海外へ。
フィリピンインフラ整備と墓じまい事業の軌道を創る

墓じまい事業担当（営業2課）

濱 碧衣 氏

代表取締役

安樂 真澄 氏

大正10年創業、平成6年に会社設立をした株式会社木下築炉は、主に工業炉施設に関連した公共事業、民間事業の受注施工を行う企業。築炉業の専門性と高い技能を備えながら、時代の変化やニーズに柔軟に対応する取り組みは、多くのメディアにも取り上げられるほど注目度が高いものばかりだ。コロナ禍の情勢が厳しい今、木下築炉はフィリピンでの火葬関連事業を本格始動。同時に、“墓じまい”という新たなビジネスプランに乗り出した。そのパワフルな事業展開の根幹には、安樂社長の揺るがない職人気質と人情があふれている…。

あんらく
安樂

ますみ
真澄 氏

■略歴 株式会社木下築炉 代表取締役。1955年、宮崎県都城市生まれ。現在、大分市在住。1974年、宮崎県立都城西高等学校卒業後、前身の木下組へ入社。1994年、法人成りし、有限会社木下築炉を設立、代表取締役就任。2007年、株式会社へ組織変更。現在に至る。

■ 築炉技能の活かせる場を海外に フィリピン事業に着手

—まず創業してからこれまでの歴史をお聞かせください。

木下築炉は会社を設立して今年で27年目になります。築炉業は非常に特殊で、技術の伝承が難しい業界。若いころに専門資格を取得して、職人3人で会社を立ちあげたのが創業のきっかけです。

現在、全国には200ほどの築炉会社がありますが、企業数は減る一方で増えることはまずないでしょう。それでも今、稼働している炉はあるわけで、社員に好条件を示してヘッドハンティングする動きもあるほど、人材確保と技能修得が難しいんですよね。

これまで県内、国内で仕事をさせてもらいましたが、働いてくれる社員のためにも、将来につながる事業を模索していました。

—会社と築炉業の将来を考えて国内から国外へ目を向けられたのですか。

既存の国内案件に新事業を上乘せしよう、と思い海外事業へ乗り出しました。これまで日本で培ってきた築炉の熟練の技は、きっと海外製品と比較しても優れているし、様々な分野で焼却炉のニーズが広がっていくと思ったんです。

3年前にフィリピンで会社を立ちあげて、税理士・弁護士は日本人スタッフ、従業員は現地の人を雇いました。

まずは海外の拠点として、フィリピンでの事業を軌道に乗せることができるように、現在取り組んでいます。



株式会社木下築炉フィリピン火葬場



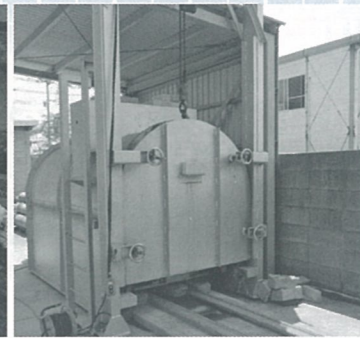
フィリピンで建設中の火葬炉施設 Heaven Memorial Park



住職による開眼供養、抜魂法要を行い墓じまいをする



墓じまいは、専門業者の手で丁寧に墓石を撤去する



遺骨の水分をとばすために使用する乾燥炉



散布が認められる大きさまで骨を細かくする

■ 諸外国のインフラ整備に向け 築炉業ならではの特色を打ち出す

——フィリピンの狂犬病対策事業に木下築炉が関わっているそうですね。

フィリピンでは3年前から火葬事業を進めていて、インフラ整備支援をしてきました。フィリピンではこれまで、狂犬病を発症した犬は土中に埋めて処分をしていたんです。ただ埋めた場所の土は汚染されて環境悪化につながる…今の日本では考えられないかもしれないけど、フィリピンでは未だに噛まれて死に至る人が何百人もいるんですよ。

大分大学医学部の研究システム開発を通じて、JICAの狂犬病対策国家プロジェクトに協力する形で、木下築炉の動物焼却炉を現地に導入することができるのは本当に誇らしいです。

——新型コロナウイルス流行による影響は大きかったのではないですか。

コロナ禍に海外渡航の規制がかかって、1年半以上フィリピンに行けなかったんです。現地の活動がここで鈍ってしまったのは痛手でした。ただ、今回の感染症で、土葬文化が強い発展途上の国では、遺体の埋葬管理が整わず悪臭問題や水質、土壌汚染といったような生活環境の悪化を起こしています。環境に配慮した高性能の炉があれば、放置されているような遺体もいねいに処理してあげることができるんです。国の情勢にあわせて焼却の提案ができたのは、築炉業ならではのですね。コロナの間も現地で従業員を雇用し続けて、準備を重ねてきた成果だと思います。



フィリピンの現地スタッフ

——世界における築炉ニーズの広がりを感じます。

環境悪化や焼却処分の問題は、フィリピンに限ったことではありませんからね。

動物焼却炉の導入も、ただ単に発注を受けただけではなく、性能と品質に対する国際的な責任が大きいと実感しています。逆に、メイドインジャパン品質を認識してもらえ、チャンスでもありますね。実物を見てもらえるし、現地で商談できる時間的メリットはきっと大きいですよ。

コロナ禍でオンライン取引や打ち合わせが増えて、海外業者との話もスムーズになりました。当社には商談から契約、導入とメンテナンスまで、自分たちの一貫したノウハウがあるし、部品調達や流通の面でさまざまな企業と業務提携し、クオリティを維持するシステムを構築しています。今、国内で扱っている築炉、人体・ペット火葬業をフィリピンから、さらに広げることができればと考えています。

■ 築炉業を活かせる “墓じまい”事業の実現に向けて

——これまでの取り組みを活かした新たな企業戦略として“墓じまい”に着目されているそうですが、具体的に教えてくださいませんか。

“墓じまい”は、ずっと前から構想としてありました。これこそ木下築炉のノウハウで、すぐにやれる事業ですから。

最近、“墓じまい”というワードや話題をちらほら聞くようになりましたね。ただ、墓じまいのことを調べたくても、インターネットで出てくる情報は墓石店が葬祭場しかないんですよ。

墓じまいで大切なのは、お墓と遺骨を親族が納得できるように処理すること。墓じまいの際は、お坊さんにお経を上げてもらって、先祖が苦勞して建てた家墓の墓石はきちんと専門業者が解体し、マニフェストを示して産廃処理をする。墓から取り出した遺骨は、洗浄をして乾燥炉で十分に乾燥させて、火葬直後のような状態にする。木下築炉の骨粉碎装置は国に実用申請していて、関係業者とも提携をしているので、海洋散骨や分骨、永代供養といった対応もできます。最後に、これらすべてを報告書にまとめて、親族にお示しする。墓じまいの申込段階から報告までトータルで扱う事業は、今の時代ニーズにすごくマッチしていると思いますよ。

——“墓じまい”に向けて動き出すきっかけは何だったのですか？

県外に出たまま故郷に帰ってこない子どもも増えてますよね。進学や就職のために県外に出て、そこで生活が始まってしまうと、なかなか拠点を故郷に移すのは難しくなる。すると墓守がいなくなるんです。手入れができていないお墓も目にしますしね。そもそも、墓に入るという選択をしない人も増えてきているし、「墓参りや維持費を子どもに負担させたくない」と思っている親世代が増えているんでしょう。

コロナ禍で、墓参りや葬儀に行けない時間があって“インターネット墓参り”などのサービスも増えてきました。これまでも、墓守ができない後ろめたさを抱えていた人たちはいたと思いますよ。ただ、その流れが近年、特に強くなったように感じるし、これまでの構想を整理して世に出すタイミングだと思ったんですよ。なので、プロジェクトに営業2課の濱（碧衣）さんを専属で配置して、墓じまいを事業としてスタートさせることにしました。しっかりしたものができあがったと思います。頑張ってくれているのがわかるので、任せる側の私も安心ですよ。

■ 社員が豊かに、幸せに生活していける基盤を提供したい

——時代のニーズが変化する中で大切にしていることはありますか。

職人になるために師匠について技術修得したような厳しい徒弟制は、今の時代の人は理解できないでしょうね。私は、苦勞して身に付けた技術を社員に共有し、できるようになるまで待って育ててきました。「そんなことして技術だけ盗まれて辞められたらどうするの」と、周りの人からよく言われましたよ。“情けは人のためならず”という人もいますが、“回り回ってわが身に還る”という続きの言葉があるんです。

人に任せられるようになると自分が楽になりますよ。フィリピンの従業員も同じ。貧しい国で家族を幸せにしたいと願う人を学歴問わず雇っています。今でも私は現場に出て、働く人の声を聞くようにしていて、人間的な付き合いの部分では絶対に平等。これを崩したら会社は成り立たないですね。

——働く人を大切にする思いが、新たな雇用形態を創出して関連事業に発展しているのですね。

そうですね。木下築炉を定年退職した後も、その技術を

活かして働いてもらいたいという思いがあって、株式会社サポートを立ち上げました。

人生100年時代といわれるけど、退職後の生活に不安を感じる人や、まだまだ働きたい人が、同じ環境で無理なく働けるような場が必要だと思って。会社としても、ずっと働いてきて、いろいろとわかっている人がいてくれる安心感がありますよ。

この会社を選んで、出会ってその後一緒に仕事をする関係になる。“時の縁”と“人の縁”がやっぱり大事なんですよ。今年、85歳で株式会社サポートを円満退職した社員がいます。働きたいだけ働き続けることができる会社は、これからの時代に求められる就労形態ですよ。

——今後の木下築炉の展望や取り組みを教えてください。

やりたいことはたくさんありますが、私の代で事業を広げることがはしませんね。私自身が、今に満足しているから。フィリピンの事業と墓じまいを続けるか…経過を見極めて、数年のうちに次の代へ継承しようと思っています。

社員の仕事っぷりは頼もしいし、不安はないです。実際に動き出せば需要が見えてくるし、続けるかどうかの見極めもできますからね。1事業5年スパンで考えて、常に引き戻れるスタンスでいます。

最近の人は、パソコンを使って情報を引き出す力がすごいですよね。ホームページを担当してもらおう人を配置してから、閲覧者が増えたと反応も早いです。任せられるところはとことん任せていきます。これからの変革は、ホームページで見てもらえるとうれしいですね。

企業データ

会社名	株式会社木下築炉
代表者	代表取締役 安樂 真澄
所在地	大分市大字迫817番地 TEL 097-523-0020 FAX 097-523-0024
設立	1994年(平成6年)9月
資本金	1,000万円
従業員数	22名
事業内容	築炉工事業 工業炉施設関係、ボイラー施設関係、火葬炉関係 産業廃棄物関係、清掃施設工事、溶接工事 焼却炉耐火物工事 他
URL	http://www.kinochiku.co.jp/